

# 動乱の序章

デルフィニア戦記 9

茅田砂胡

中央公論新社



### 目次の操作方法について

・表示させたい部分にカーソルを近づけると手の形に変わります。ここでクリックすると、該当の頁までジャンプさせることができます。

地	タイトルロゴ・マークデザイン	カバーデザイン	挿	口	カバーイラスト
図	水野デザインルーム	しいばみつお (伸童舎)	画	絵	沖 麻実也
	斎藤由加				

## 目次

1	—————	9
2	—————	22
3	—————	38
4	—————	53
5	—————	67
6	—————	104
7	—————	132
8	—————	159
9	—————	180
10	—————	195
あとがき	—————	220



アランナ●ナシアスの妹。

ジル●タウ屈指の大頭目。イヴンを高く評価している。

マーカス●タウの頭目。

パジャン●タウの頭目。

ブルーワント●サヴォア一族の実力者。

モントン●サヴォア一族の重鎮。

ブルクス●宰相。デルフィニアの裏も表も知りつくしている。

カリン●女官長。ウォルを暗殺の危機から救った。

カーサ●サヴォア公爵家執事。

アスティン●ティレドン騎士団副団長。

ドゥルーワ●先代デルフィニア国王。

アエラ●ドゥルーワの妹。サヴォア公爵家に嫁ぐ。バルロの母。

ゾラタス●タンガ国王。

ナジェック●タンガ皇太子。

オーロン●パラスト国王。

ヴァンツァー●ファロット一族。

グライア●ロアで黒主と呼ばれていた野生の悍馬。リイの騎乗を許す。

# CAST

ウォル（ウォル・グreek・ロウ・デルフィン）●デルフィニア国王。庶子であったため、一度はその地位を奪われるも多くの味方を得て再び王冠を被る。統率力に優れ、無私公正。戦士としても優秀。

リィ（グリンディエタ・ラーデン）●異世界から来た少女。華奢で可憐な外見とは裏腹に無双の剣の腕と戦士の魂を持つ。ウォルの王権奪回に類を見ない活躍を示し、戦女神と讃えられる。後にウォルと結婚、デルフィニア王妃となる。

バルロ●国内の名門サヴォア一族の当主で、公爵。ティレドン騎士団長。ウォルの徒弟で毒舌家。ウォルのことを早くから国王と支持した。

イヴン●独立騎兵隊長、兼親衛隊長。ウォルの幼なじみ。タウの自由民。

ナシアス●ラモナ騎士団長。バルロの友人

シェラ●リィ付きの女官。実は少年。元・特殊技能集団ファロットの一員。

ドラ●将軍。名馬の産地として名高いロアに領地を持つ伯爵。ウォルの養父フェルナン伯爵の親友だった。

シャーミアン●ドラの嫡子。女騎士。

ロザモンド●ベルミンスター公爵家当主。

エンドーヴァー（ラティーナ・ベス）●子爵夫人。ウォルの元・愛妾。

大華三國図



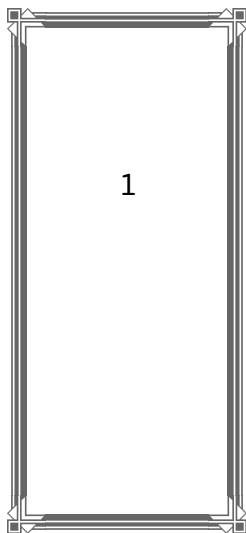
# 動乱の序章

デルフィニア戦記9

DEFINIAN WAR  
A RECORD OF THE







## 1

宴は大盛況だった。

盛装した男女が賑やかに笑いさざめいている。

夜だということを忘れそうな煌々たる灯りと絢爛

豪華な人の群、大理石と黄金と磨き上げられた鏡に彩られた大会場。

まるで天上の光景だと、もう何度も思ったことをまた考えてため息をつく。

趣向を凝らした豪華な装いの人々の中にふと、時代遅れの衣装を着た娘を見る。驚いて見返すと何の

ことはない。鏡に映った自分の姿であることに気づいて苦笑する。

若い娘は人前になど出るべきではないというのが父の信念だった。こざっぱりと身ぎれいにしていることが大事なのであって、華美な衣装など無駄だと言っていた。

鏡の中の自分は母が若い頃に着ていた緑のモスリンを着て、胸元に祖母から譲られた金のブローチを留め、薄茶色の髪にリボンを絡めて結び上げている。

これでも精一杯のおしゃれだったのだが、やはり場違いだったらしい。この場に集まっている人々は皆、あまりにも立派で、誇りやかで、豪華だった。

それも当然かもしれない。いつもなら足下にも寄れないような、身分の高い人たちばかりだ。

その人達の視線が自分に集中しているような気がしていたたまれなくなる。

逃げるようにバルコニーへ出た。

地方の小身貴族の娘が一人くらいいなくなっても

誰も気づきはしない。背後では楽士達が音楽を奏で、人々は楽しげに笑いさざめいている。

バルコニーの端には庭へ降りる階段があった。

胸を高鳴らせながら、そつと降りてみた。今日は無礼講だし、ちよつと探検してみたかったのだ。

お城の庭なんて二度と歩けないところである。

六月に近くなつて、夜でも暖かくて気持ちがいい。どきどきしながら小道を進んだ。足下に不自由はしなかった。大広間の灯りはこんな所にまで届いているし、空には皓々と輝く月がある。

正門を通つたときには完璧なまでの造形美を誇る庭園が見えた。話には聞いていても人が考えたとは思えないほどに計算された、果てがないほど広大で立派な光景に息を呑んだ。

今は迷路のような緑が目の前にある。

頭より高い生け垣はきれいに刈り込まれ、足下は細い道になつている。角を曲がるたびに現れるのは小さな花壇、蔓薔薇の絡まった棚、石造りのベンチ

や本物そっくりの獅子の銅像など珍しいものばかりだ。すっかり楽しくなつた。

どこかで水の音がする。

引かれるように歩いていくと、視界が開けた。

月明かりに照らされて、壺を抱えた半裸の女神がいた。

大理石の岩に腰を下ろし、大理石の布を腰に纏い、大理石の眼を伏せて、つきることのない水の流れをじつと見守っている。

水は壺から流れ落ち、腰を下ろした女神の廻りに小さな泉を造っている。

きれいな噴水をため息と共に見つめて、ぐるっと回つてみようとした時、何かに躓いた。

「……!?!」

倒れそうになつた体を下から太い腕で支えられた。

それは驚くほど頑丈な腕だった。自身は仰向けに横たわつたまま、上から降ってきた人の体を支えてびくともしない。

「も、申し訳ありません」

赤くなりながら急いで離れた。芝生しばふに横になっていた人に躓すいて、危うく踏みつけるところだったと気づいて、顔から火が出そうな思いがした。

寝ていた人はようやく上体を起こそうとしている。若い男の人だった。上着を脱ぎ捨てた肌着一枚の姿だ。

城内だというのにそのくだけた格好にまず驚いた。さらには相手の姿に驚いた。優れて整った容貌ようぼうに並外れて逞たくましい堂々たる体軀たいくをしている。

こちらを見上げている黒い瞳はもつとも好ましい人柄を示し、健康的な灼けた肌はなめし革のような張りと照りを持っている。

芝の上に寝ていても、この体軀の持つ力強さと敏捷さは見紛まぎれようがない。つい先程、あの大広間で晴れやかに着飾った身分の高い男の人を大勢見たが、こんなに立派な男の人は一人もいなかった。

蹴躓すいた人の意外な姿に状況も忘れてほればれと

見入っていると、その人は優しく言った。

「お怪我けがはないかな？」

慌あわてて我に返る。

「大丈夫です。あの、お加減でもお悪いのですか？  
誰かお呼びいたしましょうか？」

大広間では祝宴の真つ盛りなのにこんなところに一人で寝ているのは普通ではないと思つたのだ。

男の人は笑つて首を振つた。

「いや、結構。やつとのことで逃げ出してきたのだ。  
人を呼ばれたりしては俺が困る」

上体を起こした姿勢のまま、そんなことを言う。

「あなたは？ 招待された客人ではないのか？」

「一応はそうですが、あまりに立派な方々ばかりで  
気後れしてしまつて……」

「やはり逃げ出していらしたか？」

屈託くつたのない笑顔だった。

投げ出していた上着の裏を上に向けて芝の上に敷き、丁重な仕草で座るように促される。

ちよつとためらつた。

父は口癖のように未婚の娘が若い男と二人きりになるなどんでもないと言つていた。ふしだらだといふのである。やたらとそうした機会に娘を誘う男など、もつとも信用できないものだとも言つていた。「どうぞ、遠慮なく。直に座つたのではせつかくのドレスに草のしみがつきます」

「ありがとうございます」

素直に礼を言つて、謹んで腰を下ろした。

内心では自分自身をひどく恥じた。この人は父が言つていたような男とは違ふ。この上なく礼儀正しい立派な態度だ。いささかだらしない姿ではあるが、よく見ればその肌着も上等の絹である。

並んで腰を下ろして、大理石の噴水と空にかかる月を見上げた。

「ここは、とてもきれいなお城ですね」

何か話さなくてはいけないような気がして口を開いたのに、そんな陳腐な言葉しか出てこない。

ますます恥ずかしくなつて俯うつむいていると、相手は納得したように言つた。

「なるほど。あまりお見かけしない顔だと思つたが、初めていらした？」

「はい。今度の祝勝会に特別にお招きを受けました。厚かましいことだとはわかつていたのですが、この機会を逃したら二度とコーラルのお城を見ることはできないと思つたものですから」

「どうして？」

きつと名のある騎士だらうに、悪戯いたづらっぽい少年のような口調だつた。思わず微笑み返した。

「だって、このお城はまるで夢の国のように立派で美しいんですもの。私なんかは場違いです」

「そんなに自分を卑下ひげすることはない。王宮から招待状が届いたのならあなたは正式な客人だ。堂々としていられればいい」

「いいえ、父の身代しんだいを考えれば本当にこんなお席は身に余ります。ただ、父が生前に一度だけ、先代の



陛下のお役に立ったことがあるものですから」

そのご褒美に、あまり重要ではない晴れの席への招待客の中に名前を入れてもらった。それだけだ。

「失礼だが、父君のお名前は？」

「ダルシニと申します」

「おお。聞いたことがある。確か、友軍とはぐれた王を命がけで守り通した猛者の名だ。——あなたがそのご令嬢？」

「はい。ポーラと申します」

男の人は少し眼を見張って、優しく微笑んだ。

「奇遇だな。俺の母もポーラと言いました」

口を開きかけてまた黙った。

考えてみれば庭師のベック爺や塩漬けの魚を持ってきてくれるトマスを除けば、家族以外の男の人と口をきくのはこれが初めてだ。

急に意識してどきまぎと眼を伏せた。

石の女神が抱えている小さな壺からはつきることなく水が流れ落ちていく。

月は皓々と輝き、風は草や梢を揺らして軽やかな音を奏で、そつと頬を撫でていく。

気持ちのいい夜だった。

名前も知らない見知らぬ男の人とこんなところで二人きりであるのが信じられなかったが、立ち去ろうとは思わなかった。悪いことをしているわけではないのだからと、自分と亡き父に言い聞かせた。

「ずるいぞ、お前」

割り込んだ別の声に驚いて顔を上げると、黄金の天使像が立っていた。

いつの間にか目の前に立っていた天使をポーラはぽかんと見上げてしまった。それが生きた人間だと気づくまでしばらくかかった。

いったい自然はどんな気まぐれを起こしてこんな生き物をつくりあげたのか、あるいは自然のみがづくりうるものなのか、どんな名工も諸手をあげて降参するに違いない、絶妙の線を持った生きた彫刻だ。自分よりいくらか若い顔は薔薇色の大理石の肌を

し、頭髮は純金の輝きを放ち、両の瞳には濃い緑の寶石が埋め込まれている。申し分なく均整の取れた肢体は覇氣と生氣に満ち、ひとすじ銀を縫い込んだ黒いズボンの腰に剣を下げている。

隣にいる人と同じように肌着一枚の姿だ。脱いだ上着を無造作に肩にかけ、疲れたように片手を腰に当て、片足に重心をかけて立っている。

どう見ても男の人の仕草なのに、体つきは優美な曲線を描き、純白のレースで飾られた胸元はやわらかくふくらんでいて、ますます言葉が出なくなつた。男装の少女はからかうような眼で芝に座り込んだ男の人を見下ろしている。

「うるさ型の連中は全部おれに押しつけて、自分はこんなところで逢い引きかよ？」

「逢い引きとは違うぞ。こちら人も人混みに閉口して逃げ出してきたのだ。ポーラ・ダルシニ嬢だ」

美しい姿に恐ろしい迫力を備えた少女がまっすぐポーラを見る。思わずたじろいだだが、少女は不意に

にこりと笑つた。そうすると意外なほど可愛くなる。「一人？」

「はい。いえあの、供の者が一人おります」「家はこの近く？」

「いいえ、もうまるで山の中なんです。今からではとても帰れませんし、二の郭に泊まる所を用意していただいたそうなので……今夜はそちらに」

どきどきしながら丁寧<sup>ていねい</sup>に答えた。珍妙な服装でも剣の拵<sup>こしら</sup>えは立派なものだし、肩に引っかけた上着の裾や袖には贅沢<sup>ぜいたく</sup>な銀の刺繍<sup>ししゅう</sup>が施されている。

多分、身分の高い家の令嬢が気まぐれに男装しているのだらうと思つた。さすがに中央の華と言われる都会だけあつて、不思議な人たちがいるものだ。

「あの広間にいると息が詰まるっていうのはすごくよくわかるよ。おまけにこの格好……」

言いながら男装の少女は苛立たしげに襟元<sup>えりもと</sup>に指を突っ込んだ。カラーが気に障るらしい。

横にいる男の人がおもしろそうに笑っている。

「ドレスよりはましだと言わなかったか？」

「胴体を締めない分だけな。代わりに首がきつい」

少女は力任せに首もとの布を引つ張っている。

ポーラは呆気にとられて少女のすることを見ていたが、このままでは上等なレースのカラーが引きちぎられそうだと思うて、慌てて声を掛けた。

「あの、よろしかったら私が……」

「外してくれる？」

目の前に座り込んだ少女の首に慎重に手をやる。

真っ白なレースは複雑な形に結ばれ、滝のように

胸元に流れている。

解くのは難しくなかった。が、これを結んだ人は相当身分の高い人だ。男性の礼服には格式があって、裾の長さや飾りの付け方、こうした襟元の結び方に至るまで身分に伴った厳しい決まりがある。

この少女が自分で結べるとは思えないから、男の兄弟にでも結んでもらったのだろう。外したカラーも思った通りペントラス製の最高級品で、触れている

だけで震えがきそうな贅沢なものだ。

「助かった。やっと息ができる」

少女は嬉しそうに言つて絹のシャツの前を掴んで左右に引つ張った。カラーと違つて華奢な留め具はあつさり音を上げ、上から三つほどが一度に飛んでしまった。丸い胸が半分も見える。

ポーラのほうが赤くなつた。

「だめです！ こんなところで……」

慌ててシャツの前を掻きあわせてやると、少女はきよとんとした顔になつた。

大きな男の人は何がおかしいのか、肩を震わせて笑いを堪えている。

少女は不思議そうな顔で赤くなつていゝポーラを見つめて、片手の親指だけで爆笑寸前の男の人を指してみせた。

「これのことなら気にしなくていいけど？」

そんなわけにはいかない。

耳まで真っ赤になりながら、ポーラは精一杯の勇



気を振り絞って首を振った。

この人達がどういう関係にあるのかは知らないが、自分は男の人の前で——それが兄弟でも、肌を見せたりしてはいけないと教わった。夫だけが例外だが、それだってしかるべき時と場所での話だ。

とっさに自分の胸元からブローチを外し、少女のシャツの前を合わせて留めてやった。不格好だが、裸でいるよりましだ。

「そうしてくれなくてもいいのに……」

「いいや。ダルシニ嬢の言うとおりで。俺はお前が裸で歩いていても気にしないが、普通はそういうものほしまっておくものだ」

「面倒くさいけど仕方がないってやつだな」

どちらの声も笑いを含んだ楽しそうな響きがある。自分の家ならすぐ針と糸を持ってこさせるのにと焦っていたポーラは、その様子から、もしかしたらここではこんなことは珍しくないのかもしれないと気づいて、さらに焦った。

今度は首まで赤くなる。

とても顔が上げられない。全身に火がついたかと思つた。一生に一度しか来られないところでこんな大恥を搔くなんて、あんまりな話だ。

少女はさらに遠慮するように言った。

「逢い引きの邪魔するようで悪いんだけど、これに用があるって連中が向こうで呼んでてね。ちよつと借りていってもいいかな？　すぐ返すから」

「いいえ、あの、どうかお構いなく。私はもう失礼いたしますから……」

急いで立ち上がった。

自分も含めて遠方から来た小身豪族はあまり長居はできない。適当なところで祝宴を切り上げ、二の郭へ引き上げることになっている。

そう説明すると少女は不満そうな顔になった。

「だって、逢い引きの続きは？」

「だからそういう失礼なことを言うな。ダルシニ嬢、大広間の入り口へ戻るのなら、こちらから行かれた

ほうが近いぞ。左へ行けばすぐだ」

男の人が噴水の反対側を指さして教えてくれる。

真つ赤になりながら頭を下げて、小道を進んだ。

曲がりくねった一本道はすぐに開けて、目の前に大広間の玄関が現れた。

自分と同じような立場の人達がその近くに集まり、案内役の従者達がそれぞれの名前を確認している。

さながら『下級貴族ご一行様ご案内』である。

ポーラはどうにか遅れずにその中に混ざることができた。

まだ胸は早鐘を打ち、顔に血が上っている。淑女たるもの人前で取り乱したりしてはならないという母の教えに従い、できるだけ平静を装うとしたが、その努力は無用だった。

滅多にこんな席には出てこれない人たちだけに、どの顔も興奮気味だった。運よくドラ將軍やヘンドリック伯爵という著名な英雄と言葉を交わした人や、さらに幸運にも国王や王妃の姿を間近に見た人たち

は喜びを隠せない様子で、暗い夜道を行く間も熱のこもった口調で話していた。

若い人妻が上気した顔で話しかけてくる。

「あなた、陛下に何かお言葉を掛けていただけましたか？」

「いいえ、そんな恐れ多いことは。それにあまりにたくさんの人なんですから。お姿も拝見できませんでした」

そう答えると相手はしきりと気の毒がっていた。

ポーラ自身、祝勝会への招待状が届いたときには英雄の誉れ高い国王と戦女神いんどめがみと呼ばれる王妃の姿を見てみたいと胸をときめかせたのだが、実際にこの城を間近に見ると、そんな考えはどこかへ消え失せてしまった。なんて大それたことを考えたのかと恥ずかしくささなつた。

堂々とそびえ立つ大手門をくぐっても正門は遙か頭上はるにあり、道の両端には様々な彫像が建ち並び、広々とした道はきれいに舗装されて彼方まで伸びて

いる。まるで天国への道のようだと思つた。

馬車は空を飛んでいるかのようになめらかに走り、途中の門を通過して、正門に着くまでに果てしなく長い時間が過ぎたようだったのに、やっと正門をくぐつてみると本宮殿はさらに遠く、さらなる高みに白く誇らしげに輝いていた。本当に天上の光景のようだった。

こんなところがこの世に本当にあつたのかと感じ入る。自分の眼で見ることができただけでも至福と言ふべきなのに、今夜はその一部に泊まることさえできる。何もかも分不相応で罰が当たりそうだった。案内された二の郭の建物は瀟洒しょうしゃな造りで、部屋へ行くとテス夫人が出迎えてくれた。父の代からもう三十数年、仕えてくれている、家族同様の人である。

それでも召使いの身では正門はくぐれない。主人が宴に出ている間、先に部屋に入って用意を整えておく決まりになっている。

「宴はいかがでございました？ お嬢さま」

「すばらしかったですわ。私はまるつきり場違いだったけど、本当にすばらしかったです」

その夜、ポーラはずっと興奮気味で、テス夫人を相手に長いこと話していた。

そこにも人がいると錯覚するほど磨き上げられた無数の鏡。壮麗な天井画。現実の祝勝会と鏡の中の大広間とが混ざりあう不思議な空間。笑いさざめく人々の衣裳のすばらしかったこと、光を反射して煌めく貴婦人達の首飾りや髪飾りの眩まぶしかったこと。

「それからテス夫人、おもしろい人たちに会つたのよ。まるでつかの間の休息を楽しむバルドウト、その軍神を守護する武装した天使のような人たちだったわ。絵のような一対だって、あなたもその眼で見たらきつと言うわ。あんな立派な男の人もあんなにきれいなお嬢さんも見たことないくらい。でも、この天使様は少しばかり口が悪いの。本当に息を呑むほど美しいのによ？ 惜しいことだと思わない？

それに、それに、男の人の前だというのに、びっくりするくらい勢いよく服を脱いでしまうの！ どうしようかと思つたわ。ああいうのが都の流行りなのかしら？」

主人の脱いだ服を片づけていたテス夫人の、人の良さそうな丸い顔に軽蔑の表情が浮かぶ。

「若い娘が男の前で裸に？ いくら都でもとんでもない話です。ろくな家の娘じゃありませんよ」

「いいえ！ 違うわ。本当にすてきな、きれいな人だったのよ！ 上品とは言えないかもしれないけど、でも……」

自分の気持ちや見たものに対する感動をどう伝えたものか、ポーラはしばらく熱心に考えた。

「そうじゃないわ。先生の教えてくれる教養や礼儀作法なんかじゃないのよ。生まれながらの凛々しさ、心の高さだわ。後から身につけようとしたってできることではないのよ」

テス夫人は召使いの鑑かがみのような人だったので、

夢中で喋り続ける『お嬢さま』をたしなめ、ベッドに追いやつた。

「さあさあ。お話はまた明日になさいませ。きちんとしたご婦人は夜更かしなどなされるものではありませんよ」

夫人の言葉に従つて寝台に入つても、ポーラはなかなか寝付けなかつた。

超大型の猫のように寝そべっていた軍神バルドウ。広々とした肩と分厚い胸。鍛きたえ上げられた大きな体。その逞しさと敏捷性はだらしなく伸びていても隠せない。鎧よろいを纏つて馬上にあればあの立派な姿はどれだけ映えることだろう。いざ戦場に立てばどれだけの力を発揮し、どれだけの敵を震え上がらせることだろう。

なのに少しも怖くなかつた。黒い瞳は暖かい光にあふれ、笑顔は明るく優しかった。

男物の服を着ているのに月光も顔負けするような華やかな少女。不思議なくらい鋭い眼をして、男の

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。